

「西行桜」の《夜桜》

岩崎雅彦

世阿弥作の能「西行桜」の後半、西行(ワキ)の夢の中に現れた老木の桜の精(シテ)が、閑寂な(序ノ舞)を舞う。以下に記すのは、舞の前後の詞章である。

シテ春の夜の(序ノ舞)

シテ花の影より明けそめて 地鐘をも待たぬ 別れこそあれ 別れこそあれ 別れこそあれ

シテ待てしばし 待てしばし 夜はまだ深きぞ 地白むは花の 影なりけり よそはまだ小倉の 山陰に残る夜桜の花の枕の

シテ夢は覚めにけり 地夢は覚めにけり 夜が明けてあたりが次第に明るくなり、夢から覚める西行と桜の精は別れを惜しむ。この詞章には、次に引く『新統古今集』恋・三の藤原為相の歌が踏まえられていることが、『謡曲大観』に指摘されている(傍線部は「西行桜」と重なる部分。以下同様)。

明くる間の鐘をも待たぬつらさかな
夜深き鳥の声に別れて

この歌では男女の後朝の別れを詠んでいるが、「西行桜」では、これを友人の關係に転用して使っている。また、薄明の中、時間の推移とともに桜の花が白く浮かび上がってくる印象的な情景描写については、『玉葉集』『風雅集』の歌風との共通性が指摘されている(三宅晶子『歌舞能の成立と展開』六十九頁)。

〈序ノ舞〉の後、「別れこそあれ」が三度繰り返される。同じ言葉を三回も繰り返すのは珍しく、それだけ西行と桜の精が互いに名残りを惜しむ気持ち強く表されている。この「別れこそあれ」は和歌には用例がなく、世阿弥と同時代の武家歌人、今川了俊の『了俊歌学書』(応永十七年(一四一〇))に

春待ちえても別れこそあれ
咲きぬべき花にてしばし頼まばや
という連歌の付合が載る。

「待てしばし」という呼びかけは、終曲部において強い印象を残す。この言葉は和歌では「待てしばし夜深き鳥の声すなりさても尽きせぬ名残りなりとも」(『壬二集』恋)のように、

後朝の名残りの表現などに、よく使われる。承安二年(一一七二)に藤原清輔や源頼政ら七人の長寿を祝って開かれた白河尚齒會では、最高齢(八十三歳)の道因法師(藤原敦頼)が次のような歌を詠んでいる。

待てしばし老木の花に言問はん
経にける年は誰かまさると

この歌は足利尊氏の執奏による『新千載集』雑・上にも採られている(二七〇八番)。同集では、一七〇六・七番歌に、南北朝時代の歌人である園城寺の権僧正静伊と後宇多院宰相侍(飛鳥井経子)の歌を並べる。

朽ち残る老木の花を見るにこそ
わが七十の春も知らるれ
年を経るわが涙にぞ思ひ知る
花も老木やもろく散るらん

これら三首は、「西行桜」の構想を考える上でたいへん参考になる。いずれも老齢の作者が老木の花を見て、その姿に自分自身を重ね合わせ感懐を述べている。中でも道因の歌は、自分を投影させた老木を擬人化し、木に向かつて呼びかけ、尋ねている。西行も「わきて見ん老木は花もあはれなり今いくたびか春にあふべき」と詠んでいる(岩崎『西行桜』の《隠し本説》『鎮仙』平成十一年三月)。このように、老齢の歌人が老木の桜に自分の存在を重ね、擬人化した桜と対話するという趣向が、平安時代以来一つの型として存在していた。「西行桜」もそうした伝統的な枠組みを踏襲・

利用して作られた曲であると言える。擬人化は和歌では言葉の上だけのことであるが、能では桜の精が老人の姿となって登場し、西行と言葉を交わす。

「夜桜」という言葉は、横山大観の絵でも知られるように、現代の日本人にとっては、たいへんに馴染みのある言葉である。しかしながら、この言葉は「西行桜」以前の用例が知られていない。『日本国語大辞典』『角川古語大辞典』は「西行桜」を最古の用例として挙げており、『時代別国語大辞典』（室町時代編）は「夜桜」を立項していない。古典和歌には、桜を詠んだ膨大な数の歌が存在するが、その中に夜桜を詠んだ歌は一首もないのである。『後拾遺集』の能因法師の歌に

夜、桜を思ふといふ心をよめる

桜咲く春は夜だになかりせば

夢にもものは思はざらまし

とあるように、古典和歌の世界では桜は明るい時に見るものであり、夜に桜を鑑賞するという発想はなかった。

連歌でも室町期の連歌寄合書『連珠合璧集』に「桜トアラバ、山桜・庭桜・遅桜・初桜などいふ」とし、『連歌作法』（京都大学蔵。『未刊国文資料』所収）にも「家桜」「樺桜」等載せるが、「夜桜」はない。正保二年（一六四五）の俳諧作法書『毛吹草』にも「糸桜」「姥桜」「犬桜」等が載るのみである。

「西行桜」では「山陰に残る夜」から「夜桜」の

語を導き出しており、厳密には「夜桜」が単独で使われているわけではない。夜が明け切らぬことを意味する「残る夜」は、和歌に多く用例が見られる語で、世阿弥はこの言葉をきっかけにして「夜桜」という言葉をつなげた。世阿弥以前に「夜桜」という言葉はなかった、言い換えれば「夜桜」という言葉は世阿弥が作り出した言葉であるという証拠はない。しかし、当時においては「夜桜」はきわめて特異な言葉であったと言えるだろう。

さて、「夜桜」の語が使われている作品も一つある。廃曲「不逢森」（別名「反魂香」。観世十郎元雅作か）がそれである。鎌倉亀が江が谷に住む女（シテ）が、商いのため都に上った父（ワキ）を尋ね、尾張の不逢森で宿に泊るが、病いのために死んでしまう。都から戻る途中、偶然同じ宿に泊り合わせた父は、娘の死を聞かされ、次のように述懐する。

げにやそれぞとは 知れども見えぬ夜

桜の 別れさこそと花散りし 森の木

蔭もなつかしや

父は死に顔を見ることのできなかつた娘を、見えない夜の桜に例えている。「西行桜」では、「残る」は「夜」にかかり、「夜桜」を導き出すが、「不逢森」では「見えぬ」は直接「夜桜」にかかっており、独立した一語として使われている。この「見えぬ夜桜」は、今日のような鑑賞の対象としての夜桜ではなく、心の中に思い浮かべる夜桜である。

江戸中期になると、宝永六年（一七〇九）の雑俳書『つゞら笠』に「夜桜や御庭をぬけてかくれ里」の句が見え、享保十二年（一七二七）には、肥前の大名大村純庸（蘭台）が江戸藩邸で催した花見の席での歌仙の句集に「夜桜」という題を付けている。

「夜桜」という言葉は、名曲「西行桜」とともに広く知られるようになり、江戸中期には謡曲の語句に精通していた俳諧師たちによって使われたこともあって、一般的な語となった。夜桜を鑑賞する風習は、この頃に盛んになったようである。吉原仲之町の夜桜は、歌舞伎の舞台や歌川広重の浮世絵などで有名だが、遊郭文化が開いた江戸期には、「夜桜」は遊郭を象徴する表現としても使われた。また俳諧では「夜桜の寝姿を見る泊り客」（『つゞら笠』）のように「夜桜」を遊女の比喻としても使うが、若い美女を夜桜に例えた例としては、先述の「不逢森」が早い例と言える。

「花の枕」は歌語「花の下臥し」と枕詞「草枕」を融合させた言葉で、桜の木の根元で寝ることを意味する。和歌の用例は「老若五十首歌合」（建仁元年（一一〇一）の藤原忠良の

木のもとの旅寝夜ぶかき苔の上の

花の枕に春風ぞ吹く

が、唯一の例である。したがって「夜桜の花の枕」と続く「西行桜」の表現は、きわめて個人的なものであったことになる。

（国学院大学非常勤講師）